大分県現代俳句協会句会報　第14号

令和３年８月31日発行

【令和３年　第１回雑詠句会結果＆第２回雑詠句会選句号】

第一回雑詠句会結果発表（選句＆選評）

１９点　一つずつ手離す齢秋の暮　灘波瑞枝

１４点　どんぐりのまだ青々と部活の子　神慶子

１４点　跳び箱の突き手の先に春立てり　梶原千代

１４点　月の射る土偶はああと言ひしまま　福田英子

１３点　結び目のほどけぬ余生枯むぐら　谷川彰啓

１２点　指切の小指がさわぐ夏祭り　井上政人

《10点句》

どの夢もいつか銀河へ消えてゆく　田口　辰郎
ストーブの猫やわらかくなるばかり　足立　攝
寒月を揺らして入る露天の湯　小川　良子
あと少し笑顔を足して小春とす　田口　辰郎
枯芒村に呼び込む道がない　上田たかし

《9点句》

未来図へ飛び出してゆく冬木の芽　佐々木　玉
着ぶくれて優しさ少し置き忘れ　時松由美子
三月の色鉛筆に恋をする　陣野千恵子
言い訳はしないと決めた冬銀河　坂本　一光
薄氷やきのうの嘘がばれそうで　佐々木　玉
家族増え賀状はみだす笑顔かな　赤嶺　信子

《8点句》

鳥渡る鎖骨に神をやどらせて　河野　輝暉
逝くことも留まることも沙羅の花　森山　秀子
枯野きて句帳に残る風の音　立麻　琴路
ネクタイも名刺もいらぬ初詣　河野　則子

《7点句》

古衣に色足袋合はす一葉忌　小野　智輔
障子閉めほどよき距離となるふたり　足立　町子
寒菊のひかりも母の忘れもの　足立　町子
百千鳥風青ければ青く鳴く　田口　辰郎
嫁入りの行李を捨てる梅日和　宮川三保子

《6点句》

しがらみが嫌いで空き家の烏瓜　有村　王志
トラクター売って農家の冬去りぬ　加藤　征孝
己が影踏みつけつまづく冬の道　大川　千秋
ささくれのように西日が突き刺さる　平田千代子
豆腐切るまでの掌水温む　赤嶺　信子
この坂も越えてひと息着ぶくれる　甲斐加代子
点滴の明日の手術や冬茜　安森　範明
枕辺に野辺広がりぬ虫時雨　福田　英子
妻旅におでん三日の鍋の底　甲斐　素純
廃線の駅に飾りし夏薊　森山　秀子
表札の護る空き家に春の雪　田代　直之
ホロホロと泣きたるごとく銀杏散る　井上　政人
鶯餅の粉を払えば飛び立てり　梶原　千代

《6点句つづき》

密葬の貼り紙のあり大根引く　福井トミ子
忠告に背を向け歩く冬の道　飯田　幸子
理不尽も無理も受け入れ年明る　早澤まり子

《5点句》

遠い日の麦とろ作った父の背　早澤まり子
コロナにも自粛はしない虫の声　坂本　一光
冬木立すべての音を透かしをり　油布　晃
点滴に春の光を注ぎ込み　御手洗豊海
3・11風化させない海がある　佐藤　哲夫
小春日の窓辺に椅子を二つ置く　赤嶺　信子
三寒の走れぬペンと四温待つ　甲斐加代子
過去となる今日という日の曼珠沙華　灘波　瑞枝
廃屋に風が息継ぎ山眠る　上田たかし
子を産みし日のかなしみのぼたん雪　伊藤　利惠
想い出の半分昭和藪椿　田代　直之
初恋の秘めたるままに卒業す　西峯　峰子
冬青空一掃したき世の不安　田中　充
春寒へ刃物のごとく煙立つ　幸谷　恵子

《4点句》

立春や新書の香りゆたかなり　佐藤　哲夫
自粛待機いても立っても鳥渡る　瀬川　剛一
鳥帰る波止に歓喜の引揚船　下司　正昭
薄氷の底に農婦の深き皺　幸谷　恵子
出征の兄遠くなる終戦忌　菅　勲
芋食うや戦後の日本に又コロナ　加藤　征孝
オリーブもぐアテネと同じ空をもぐ　河野　則子
草刈女家風に慣れし腰かげん　菅　攝子
日短しピエロの靴の先の反り　小野　智輔
今生の廻る舞台や梅の花　甲斐　順子
黒鍵の少し重たい春隣　足立　攝
野獣めく車列のライト秋の暮　神　慶子
錠剤を数える日々や山眠る　鎌倉真由美
イヨマンテの夜を広げて春の雨　児玉　利子
バレンタインデーあげるあげないあげよかな　鍬田　建二
冬籠りして目を逸らす核のゴミ　足立　鶴男

《3点句》

病む妻にほうれんそうの紅を買う　油布　晃
晩年に思いめぐらすちゃんちゃんこ　時松由美子
青春の夢は花野を渡る風　御手洗豊海
雪来るか萬年筆で書く日記　谷川　彰啓
一輪の水仙の香に救われる　稲田久美子
柴栗を拾って村を売りに出す　上田たかし
友だちの訛うつくしレノンの忌　伊藤　利惠

第一回雑詠句会作品集（点盛）

1 ②母の背の広きなるかな掘炬燵　甲斐　素純
2 ⑥妻旅におでん三日の鍋の底　甲斐　素純
3 巣籠りのお伴八鹿今年酒　甲斐　素純
4 ⑥トラクター売って農家の冬去りぬ　加藤　征孝
5 ④芋食うや戦後の日本に又コロナ　加藤　征孝
6 トラクター売られて行くか明日のわが身に　加藤　征孝
7 ⑩どの夢もいつか銀河へ消えてゆく　田口　辰郎
8 ⑩あと少し笑顔を足して小春とす　田口　辰郎
9 ⑦百千鳥風青ければ青く鳴く　田口　辰郎
10 ②分校の庭栗おとす笑顔かな　宮川三保子
11 ②傷ついて婚姻色の鮭遡上　宮川三保子
12 ⑦嫁入りの行李を捨てる梅日和　宮川三保子
13 ①冬薔薇錆た鋏の初仕事　井元　扇岳
14 コロナ禍やジングルベルの宇宙の歌　井元　扇岳
15 ①柿熟れる過疎の夕暮佇ずみて　井元　扇岳
16 ⑩ストーブの猫やわらかくなるばかり　足立　攝
17 ③破魔矢売る巫女も宮司もマスクして　足立　攝
18 ④黒鍵の少し重たい春隣　足立　攝
19 ⑧鳥渡る鎖骨に神をやどらせて　河野　輝暉
20 赤子泣く沈黙いろの蝶が飛び　河野　輝暉
21 ①怪我をせし指の先から秋祭　河野　輝暉
冬銀河「はやぶさ2」の道標　田代　直之
冬雲雀飛ばずに歩く空がある　吾　亦　紅
春近し久大線に風立つ日　井上　則子
破魔矢売る巫女も宮司もマスクして　足立　攝
鉛色の空より孤独羽抜鳥　灘波　瑞枝
スタンディングオーベイションななかまどななかまど　瀬川　剛一
小春日や初恋に会う古希の会　神　慶子
柚子の湯に人棲む胸をはなちけり　伊藤　利惠
春光や九重の峰と空と川　井上　則子
落ち椿灯をともしつつ地にかえる　菅　勲
山茶花を散らし跳びたつ群雀　大川　千秋
突然の陽射しにひるむ蕗の薹　陣野千恵子
こぼれ湯のささやく如く春の月　安森　範明
雲の影生れて流れし大枯野　福田　英子
水仙の香りことさら重たくて　佐々木　玉

22 ②コロナ禍や黙り色して秋の蝶　河野　則子
23 ④オリーブもぐアテネと同じ空をもぐ　河野　則子
24 ⑧ネクタイも名刺もいらぬ初詣　河野　則子
25　振り袖の若き娘と孫競う　大神　愛子
26　四十六年目満月と重なるハロウィン　大神　愛子
27 ①年重ね牛の如くに生える日々　大神　愛子
28 ②風の目で湯島の梅を見ておりぬ　吉田　素子
29 ①絡み合う毛糸をほぐし雨水来る　吉田　素子
30　初恋が遠ざかってゆく冬灯し　吉田　素子
31 ⑲一つずつ手離す齢秋の暮　瀧波　瑞枝
32 ③鉛色の空より孤独羽抜鳥　瀧波　瑞枝
33 ⑤過去となる今日という日の曼珠沙華　瀧波　瑞枝
34　球磨川氾濫一瞬杉丸太の流れだ　有村　王志
35 ②水番の物音ひとつも照らす月　有村　王志
36 ⑦しがらみが嫌いで空き家の烏瓜　有村　王志
37 ②秋の蚊や執念深き私生活　永松左世美
38　電子辞書手慣れし操作今朝の冬　永松左世美
39 ①いぶし銀の秋刀魚食卓は夕餉　永松左世美
40 ⑧逝くことも留まることも沙羅の花　森山　秀子
41 ⑥廃線の駅に飾りし夏薊　森山　秀子
42 ②若冲の筋目書なる芭蕉かな　森山　秀子
43　わが道の標となりて水仙花　梶原　千代
44 ⑭跳び箱の突き手の先に春立てり　梶原　千代
45 ⑥鶯餅の粉を払えば飛び立てり　梶原　千代
46　運の字の車に乗って厄落し　あべまさる
47 ①座りすぎは寿命縮める福達磨　あべまさる
48　歳末の「おうち時間」に活気あり　あべまさる
49 ②柚子釜の臍に夜風の機嫌かな　菅　攝子
50 ④草刈女家風に慣れし腰かげん　菅　攝子
51 ①花蜜柑見て来し喉の喜べり　菅　攝子
52 ①猫の唄かなしき色の冬月夜　菅　登貴子
53　買い味噌の時の柔さや祖母の声　菅　登貴子
54 ①かすみ草見守る人の冬やさし　菅　登貴子
55 ③病む妻にほうれんそうの紅を買う　油布　晃
56 ⑤冬木立すべての音を透かしをり　油布　晃
57 ①ブルーベリー枯るる色にて魅せてをり　油布　晃
58 ③晩年に思いめぐらすちゃんちゃんこ　時松由美子
59 ⑨着ぶくれて優しさ少し置き忘れ　時松由美子
60 ②笑みサロン姉の歩幅や落葉道　時松由美子
61 ③青春の夢は花野を渡る風　御手洗豊海
62 ⑤点滴に春の光を注ぎ込み　御手洗豊海
63 ①生きている一病息災春を待つ　御手洗豊海
64 ②雷神の筆鮮やかに時空越え　嶋末　洋子
65　蓑虫の糸一本に揺惑う　嶋末　洋子
66 ①錦秋や真一文字に筆を引く　嶋末　洋子
67 ②ハヤブサの浦島太郎の星光る　福井トミ子
68　保護色の山の賑あい根深汁　福井トミ子
69 ⑥密葬の貼り紙のあり大根引く　福井トミ子
70 ③雪来るか萬年筆で書く日記　谷川　彰啓
71 ①遠くまで光る寂しさ冬銀河　谷川　彰啓
72 ⑬結び目のほどけぬ余生枯むぐら　谷川　彰啓
73 ④立春や新書の香りゆたかなり　佐藤　哲夫
74 ⑤3・11風化させない海がある　佐藤　哲夫
75　寒灯の庭を何かが横切れり　佐藤　哲夫
76 ④自粛待機いても立っても鳥渡る　瀬川　剛一
77 ③スタンディングオーベイションなかまどななかまど　瀬川　剛一
78 ②ラグビーや我が家に欲しきノーサイド　瀬川　剛一
79 ⑥己が影踏みつけつまづく冬の道　大川　千秋
80 ①枯れ葛につまづくことも老ひなりし　大川　千秋
81 ③山茶花を散らし跳びたつ群雀　大川　千秋
82 ⑥ささくれのように西日が突き刺さる　平田千代子
83 ②水の面をついとくすぐる秋茜　平田千代子
84 ①坂道の風のんのんと秋の色　平田千代子
85 ③一輪の水仙の香に救われる　稲田久美子
86 ①会釈する視線の先は陽炎えり　稲田久美子
87　あれそれで廻る職場の梅見かな　稲田久美子
88 ⑭どんぐりのまだ青々と部活の子　神　慶子
89 ③小春日や初恋に会う古希の会　神　慶子
90 ④野獣めく車列のライト秋の暮　神　慶子
91 ⑦古衣に色足袋合はす一葉忌　小野　智輔
92 ④日短しピエロの靴の先の反り　小野　智輔
93 ②少女より少年匂ふ雪ばんば　小野　智輔
94 ②初競りやマグロ祝儀も桁違い　原田　勝子
95　冬うらら聖地にドーンと神楽殿　原田　勝子
96　初東風に行き交う人や声もなし　原田　勝子
97 ⑥豆腐切るまでの掌水温む　赤嶺　信子
98 ⑤小春日の窓辺に椅子を二つ置く　赤嶺　信子
99 ⑨家族増え賀状はみだす笑顔かな　赤嶺　信子
100　一葉の願い叶えぬ蜘蛛の糸　長谷川正伸
101　鴨の足泳ぐに難き水を踏む　長谷川正伸
102　難解な詩集に刻の経つ夜長　長谷川正伸
103 ③柴栗を拾って村を売りに出す　上田たかし
104 ⑩枯芒村に呼び込む道がない　上田たかし
105 ⑤廃屋に風が息継ぎ山眠る　上田たかし
106 ②温かな湯に溶けてゆく重き肩　飯田　幸子

107 ②振り向かず去りゆく友よ霜の夜　飯田　幸子
108 ⑥忠告に背を向け歩く冬の道　飯田　幸子
109 ④鳥帰る波止に歓喜の引揚船　下司　正昭
110 旧正のサイゴン炎と血と泥と　下司　正昭
111 メーデー歌運河はヘドロの水淀み　下司　正昭
112 ③友だちの訛うつくしレノンの忌　伊藤　利惠
113 ③柚子の湯に人棲む胸をはなちけり　伊藤　利惠
114 ⑤子を産みし日のかなしみのぼたん雪　伊藤　利惠
115 立春や瞼の重き金曜日　陣野千恵子
116 ⑨三月の色鉛筆に恋をする　陣野千恵子
117 ③突然の陽射しにひるむ蕗の薹　陣野千恵子
118 ⑥この坂も越えてひと息着ぶくれる　甲斐加代子
119 ⑤三寒の走れぬペンと四温待つ　甲斐加代子
120 ①新雪のしじまを揺らす琴の弦　甲斐加代子
121 ⑤遠い日の麦とろ作った父の背　早澤まり子
122 龕落つ傘寿の近き漁夫の手に　早澤まり子
123 ⑥理不尽も無理も受け入れ年明る　早澤まり子
124 ⑤コロナにも自粛はしない虫の声　坂本　一光
125 ⑨言い訳はしないと決めた冬銀河　坂本　一光
126 ①変化など望まない日のつむじ風　坂本　一光
127 ③冬銀河「はやぶさ2」の道標　田代　直之
128 ⑥表札の護る空き家に春の雪　田代　直之
129 ⑤想い出の半分昭和藪椿　田代　直之
130 ③冬雲雀飛ばずに歩く空がある　吾　亦紅
131 ①遮断機の無い踏切を雪の道　吾　亦紅
132 冬木立イルミネーション鼓動めく　吾　亦紅
133 ⑥点滴の明日の手術や冬茜　安森　範明
134 ②退院し帰れば庭に梅一輪　安森　範明
135 ③こぼれ湯のささやく如く春の月　安森　範明
136 ②寒紅の口もとキリリ太鼓打つ　鎌倉真由美
137 あやまちを責めるか宿のもがり笛　鎌倉真由美
138 ④錠剤を数える日々や山眠る　鎌倉真由美
139 ①晴天が三日続いて弥生くる　児玉　利子
140 この町に生き六十年の豊後梅　児玉　利子
141 ④イヨマンテの夜を広げて春の雨　児玉　利子
142 ⑧枯野きて句帳に残る風の音　立麻　琴路
143 手に拾ふしぐれ紅葉に空仰ぐ　立麻　琴路
144 冬山の向ゐに生きて拝すかな　立麻　琴路
145 ⑥枕辺に野辺広がりぬ虫時雨　福田　英子
146 ⑭月の射る土偶はああと言ひしまま　福田　英子
147 ③雲の影生れて流れし大枯野　福田　英子
148 ①春惜しむ無観客のコンサート　岸本千鶴子
149 ①老犬に残る枯野のひほひかな　岸本千鶴子
150 ②てふてふのこれより二千キロの旅　岸本千鶴子
151 ②初鏡一瞬母を重ねけり　立麻　琴路
152 ①いづくとも山河はやさし日向ぼこ　立麻　琴路
153 ②黙したるひいなに気品生まれけり　立麻　琴路
154 ⑫指切の小指がさわぐ夏祭り　井上　政人
155 ⑥ホロホロと泣きたるごとく銀杏散る　井上　政人
156 ②風ふかば花びらとなる冬の蝶　井上　政人
157 ⑦障子閉めほどよき距離となるふたり　足立　町子
158 ⑦寒菊のひかりも母の忘れもの　足立　町子
159 ①天国と言えなくもない梅の下　足立　町子
160 ①独り居の日日ゆく仲間新暦　甲斐　順子
161 ④今生の廻る舞台や梅の花　甲斐　順子
162 出会いかな桜吹雪の地に空に　甲斐　順子
163 ⑩寒月を揺らして入る露天の湯　小川　良子
164 ①冬ぬくし長野馬貞の墓掃除　小川　良子
165 二月一日移動命令冴返る　小川　良子
166 ⑨未来図へ飛び出してゆく冬木の芽　佐々木　玉
167 ⑨薄氷やきのうの嘘がばれそうで　佐々木　玉
168 ③水仙の香りことさら重たくて　佐々木　玉
169 集いなく鐘ひそやかな晦日蕎麦　谷本　親史
170 繰り延べを気遣う効験初詣　谷本　親史
171 感染症薄れもまだし春の月　谷本　親史
172 ③春近し久大線に風立つ日　井上　則子
173 ③春光や九重の峰と空と川　井上　則子
174 ②白梅の一輪二輪そして五分　井上　則子
175 ①雨あとの樹々の香春の匂ひせり　西峯　峰子
176 ①蜆汁恩師のことば蘇る　西峯　峰子
177 ⑤初恋の秘めたるままに卒業す　西峯　峰子
178 ①草枯るる地の揺かごに眠りつく　安田　文
179 去年今年治まる気配見せぬ敵　安田　文
180 冴返える躊躇し身なり整える　安田　文
181 春先番いよいよ猫の恋の声　久枝　花城
182 竜の姿の枝にちょんちょん梅の花　久枝　花城
183 大概は目白のたかる梅の花　久枝　花城
184 ②ろりろりと蛇口をつたふ養花天　松廣　李子
185 ①地図上の春一番の死のゆくへ　松廣　李子
186 なまきずも枯るる間もなき絵踏かな　松廣　李子
187 ①落椿果てて魂残りけり　鍬田　建二
188 ①春雨のそろりそろりと地に吸はれ　鍬田　建二

189 ④バレンタインデーあげるあげないあげよかな　鍬田　建二
190 ①三日の月余生の支点定まらぬ　田中　充
191 ①ぬくめ酒欠けも凹みもかかえきて　田中　充
192 ⑤冬青空一掃したき世の不安　田中　充
193 ④薄氷の底に農婦の深き皺　幸谷　恵子
194 黒鍵を弾く春昼の弱き指　幸谷　恵子
195 ⑤春寒へ刃物のごとく煙立つ　幸谷　恵子
196 ④出征の兄遠くなる終戦忌　菅　勲
197 ③落ち椿灯をともしつつ地にかえる　菅　勲
198 ②初雪を乗せて静もる捨て小舟　菅　勲
199 ①デイケアは茶寿を目指してスクワット　成清　正之
200 ②雪国へ行く不安なポストのはがきたち　成清　正之
201 ②降る雪の積らぬ國にいてわびし　成清　正之
202 目の覚めて窓の白さや雪景色　甲斐千恵子
203 ①庭とりの春一番によろめけり　甲斐千恵子
204 草萌へやまったのは入る相撲かな　甲斐千恵子
205 ②青空と鳥と自由と梅の風　佐藤　珠幸
206 ②寒灯の窓にへのへのもへじかな　佐藤　珠幸
207 ②水仙の囁きを聞く伊豆の海　佐藤　珠幸
208 最澄の春の憂鬱延暦寺　足立　鶴男
209 ①源平の夢のかたちに熊谷草　足立　鶴男
210 ④冬籠りして目を逸らす核のゴミ　足立　鶴男

第一回雑詠句会選＆選評◆順不同◆

小野　智輔　選

≪7・9・40・62・89・107・108・112・128・152≫

大神　愛子　選

≪5・31・89・94・107・123・168・173・197・201≫

31　一つずつ手離す齢秋の暮　（灘波　瑞枝）

手離す齢、それに秋の暮、何とも切ない情緒あふれる句。ある程度の高齢者の方だろうか。あれもこれも断捨離する気持の切なさが、秋の暮れの寂しさと重なって詠まれている。

私も少しずつ断捨離をしているが、心は辛く寂しいので、この句に不思議と引かれた。

小川　良子　選

≪33・55・74・78・118・127・142・172・196・207≫

74　３・１１風化させない海がある　（佐藤　哲夫）

３・１１の地震の恐ろしさを後世に伝える義務があると思いこの句を選びました。

宮川三保子　選

≪5・21・27・90・91・99・114・156・196・210≫

196　出征の兄遠くなる終戦忌　（菅　勲）

太平洋戦争で出征された最愛のお兄さんです。無事の帰還を願っていましたのに戦死されたのですね。今年もまた八月十五日がやってきます。戦後七十五年になりました。年を重ねるたびに想い出もだんだん遠くなってゆきます。十七文字の中に、無念の思いや一生忘れない悔しさ、切なさが伝わってきました。

田口　辰郎　選

≪16・44・66・84・104・108・157・173・174・201≫

174　白梅の一輪二輪そして五分　（井上　則子）

初めて聞く名前の人にも素晴しい句が大変多くなった。会員の質に於いても県現俳協は、全盛期の入口に立ったのではと感じている。

さてわれわれは対象の一点を切り取って口誦する様に教えられた。掲句は白梅が一輪二輪と咲いて、やがて五分咲きの梅になったと、言う。白梅の成長と時間の流れまで鮮明に表現してみせた。一点の静止画を言葉にすることは容易でも、時の流れを五七五にまとめるのは難しい。感動の一句だった。

甲斐　順子　選

≪18・59・104・118・119・134・151・178・188・192≫

菅　攝子　選

≪7・9・19・72・74・83・105・116・142・166≫

あべまさる　選

≪8・16・22・33・92・141・167・189・200・210≫

足立　攝　選

≪8・19・28・35・82・114・117・141・146・154≫

菅　登貴子　選

《8・12・19・31・32・44・55・82・125・172》

55　病む妻にほうれんそうの紅を買う

（油布　晃）

ほうれんそうといえば、栄養価が高いことで知られる。根元の赤い所は特に鉄分などを多く含む。病んでいる妻に、元気になってもらおうと選んでいる優しい姿が、目に浮かぶようだ。

河野　則子　選

《18・36・37・51・59・69・72・118・154・157》

157　障子閉めほどよき距離となるふたり

（足立　町子）

年をとると言う事は、お互夫婦でコミュニケーションを取るのに苦労する事でもある。耳、目、理解力、テレビの音量なども違う。障子というのは、ドアーや襖に比べると柔らかい。若い時はそう気が付かなかったが、晩年になるとこの便利な距離感が役に立つ。どうぞ、この白い障子文化を残しましょう。私たち夫婦にも思いあたる、共感出来る一句です。

河野　輝暉　選

《19・23・45・50・59・69・97・114・138・158》

19　鳥渡る鎖骨に神をやどらせて

（自句自解）途方もない波濤万里を渡る小体の鳥の脅威。現実である故に当たり前と見過ごしがちの自然現象である。この渡り鳥は、遠くへ無事到着の予測は立っていて、不安は無いのだろうか。最も酷使する鎖骨に魅かれる。神が集中的にそこに作動していて、神業とも、神の酷使とも感じる。

佐藤　哲夫　選

《24・40・41・73・80・93・99・109・141・157》

谷川　彰啓　選

《12・17・41・93・97・108・128・133・138・142》

128　表札の護る空き家に春の雪

（田代　直之）

空屋になったが表札はそのまゝ残されている。そこに春の雪が降り出した。この厳しい現実を作者は〈表札の護る空き家に春の雪〉ととらえた。この鋭い感覚と視線が現代をえぐる俳句作品として見事に結実させた。

長谷川正伸　選

《2・24・78・88・99・133・146・159・177・195》

146　月の射る土偶はああと言ひしまま

（福田　英子）

喋れぬ土偶がああと言ったまま現在の月を見ている。土偶に月の光が当たるのを見て、口にスポットを当て、この句を上手くまとめたと思います。土偶は現在に蘇り、現在をどう見ているのか、月の光は昔と今とでは違うのだろうか。私たちの知らない事をどれだけ知っているのか、話が出来るのなら聞いて見たい気持ちになる。

有村　王志　選

《7・8・31・59・72・88・99・116・125・157》

157　障子閉めほどよき距離となるふたり

（足立　町子）

掲句、言語空間の間合いの感応に魅かれる。恐らく、そう若くはない者同士、長い人生を二人して懸命に乗り越えてきた様々な出来事の内面の照射が、中七の「ほどよき」に巧みに活かされている。そのお二人のほほえましい姿が目に浮かぶ。

吾　亦　紅　選

《36・58・70・105・123・125・142・166・193・195》

142　枯野きて句帳に残る風の音

（立麻　琴路）

枯野に遊んで、風の句ばかり、風が身に凍む。

井元　扇岳　選

《24・74・98・99・113・121・129・193・206・210》

74　３・１１風化させない海がある

（佐藤　哲夫）

３・１１風化させない海がある。たんたんとした句である「３・１１」のこの数字の中に秘められた奥深い句の中に、どれ程の悲しい言葉が、あるだろうか？　人生の死が突然に本人の心に「何じゃこの有様は」一瞬の、間に考える間もなく、ただ頭の中がまっ白になったことであろう。親兄弟に別れを告げる間もなく、「３・１１風化させない海がある」私はこの句を読み、心の中にいきどおりと悲しみを覚えました。作者に感謝申し上げたい。

下司　正昭　選

《5・42・64・72・112・133・135・155・166・196》

133　点滴の明日の手術や冬茜

（安森　範明）

病院で医師から手術を勧められ詠者は思い悩んだ。手術をするべきか、このまま内科治療を進めるべきか、夜も眠れず考え続けた。色々と

思い悩んだ末、手術する事にふみ切ったが、手術を翌日に控え心配で夜も眠れず考え込んでしまう。無事に成功するだろうか。もしもの事があったらどうしよう。家族の事も気にかかる。そんな事を考えている内に夜が明けてきた。その時ふと窓の外を見ると朝の茜空が目に入った。そんな事を連想させる秀句だと思います。

灘波　瑞枝　選

≪7・41・50・72・85・104・118・123・128・161≫

永松左世美　選

≪16・45・47・49・79・125・142・153・154・174≫

加藤　征孝　選

≪15・42・99・104・158・166≫

99　家族増え賀状はみだす笑顔かな

（赤嶺　信子）

今、世の中は一人生活の者の多い多いこと。自分もその一人だが、家族が増えて大変喜ばしいことじゃないかと思う。自分ごとで恐縮ですが、私の男の子が、結婚してこの冬には子供が生まれる予定だが、それにしても一人でも増えることが喜ばしいことだと思う。せめて二人はと思う。それも夢なのかも知れない。

岸本千鶴子　選

≪2・8・23・88・90・91・92・98・116・145≫

御手洗豊海　選

≪7・24・61・62・63・108・118・125・177・187≫

安森　範明　選

≪17・31・41・76・109・121・124・138・146・163≫

109　鳥帰る波止に歓喜の引揚船

（下司　正昭）

終戦直後昭和21年、波の背の背にゆられてゆれて。田端義夫の唄う「かえり船」の大ヒット曲があり、私もカラオケで何回か唄っている。現代の若手歌手の味も素っ気も無い唄とは全く違い、詩の内容、曲と言い、心を打つものがある。戦地から祖国に帰る船の中で感極まっている。二度と戦争を起こしてはならないとの作句者の気持が痛い程伝わって来る。「鳥帰る」が効いている。

甲斐千恵子　選

≪2・9・31・40・49・79・88・98・163・177≫

福田　英子　選

≪16・44・69・72・114・127・131・148・149・203≫

原田　勝子　選

≪2・9・31・40・49・79・88・98・163・177≫

123　理不尽も無理も受け入れ年明る

（早澤まり子）

あるあるあると、私も全く同感です。この世の中は理不尽無理の多い昨今、我慢しなければならない事が多いですね。でも作者は受け入れると云う優しい言葉で表現していると思います。年が明けない事はない、きっと新しい年になって良い事もあるだろうと、信じて受け入れていると思います。「受け入れる」と「年明る」に感動しました。

佐藤　優美　選

≪16・31・32・58・59・88・129・146・150・154≫

16　ストーブの猫やわらかくなるばかり

（足立　攝）

私は猫が大好きです。猫はぬくもりの無いところでは縮こまって身体を硬くしています。暖かいストーブの前では猫は安心して力を抜いて身体をのばして横になっているのでしょう。それを「やわらかくなるばかり」とはなんとピッタリの表現でしょう。

神　慶子　選

≪7・9・23・44・62・76・104・105・146・192≫

甲斐加代子　選

≪33・40・44・59・86・97・130・147・173・207≫

33　過去となる今日という日の曼珠沙華

（灘波　瑞枝）

今日も明日には過去となる。精一杯今日という日を生きてゆこうと云う作者の思いが、曼珠沙華と云う、真っ赤な花に託されて、共鳴致しました。晩年になると、特に一日一日を大事に、そして、願わくば、炎えて生きたいですね。

吉田　素子　選

≪16・24・31・36・69・104・154・163・167・176≫

山本　悦子　選

≪31・55・56・70・74・126・142・146・166・167≫

嶋末　洋子　選

≪8・40・81・82・116・121・155・163・172・197≫

田代　直之　選

《1・7・12・19・31・44・103・104・154・166》

103　柴栗を拾って村を売りに出す
（上田たかし）

柴栗は山のやせ地に自生する栗で「山栗」とも呼ばれている。村は人口流出、高齢化社会で年寄りばかり。「村を売り出す」観光名所も、名物もない。昔、どこかの村に「梅栗植えてハワイに行こう」というキャッチフレーズがあったが、せめて柴栗を拾って道の駅にでも出荷して村の存在感をアピール出来たらと言うことであろうか。そうであればなおさら切ない。

早澤まり子　選

《2・7・8・36・64・104・155・160・184・198》

2　妻旅におでん三日の鍋の底
（甲斐　素純）

妻が留守の間おでんを食べながら帰りを待つ夫の気持が分かるような気がします。長い時を経て信頼と絆を培ってきた家族のぬくもりを感じる句と思いました。

赤峰佐代子　選

《41・44・60・82・91・118・161・166・167・198》

谷本　親史　選

《12・22・60・62・79・106・114・121・163・196》

114　子を産みし日のかなしみのぼたん雪
（伊藤　利恵）

「子を産みし日」でお子さんを産んだことを振り返った句です。出産の喜びは体験した方だけが抱ける至福の感慨でしょう。それが喜びを越えて「かなしみ」と表現されたのが、胸迫る心情で伝わってきます。胎内の命が形ある生命を迎えるお披露目。けれどすべての命は有限の宿命を背負います。「ぼたん雪」に昇華される悲哀と愛憐溢れた深吟句に、到底表現することのできない満幅のかなしみの心を感じます。

時松由美子　選

《5・72・76・104・119・120・125・135・158・161》

120　新雪のしじまを揺らす琴の弦
（甲斐加代子）

外は真っ白い雪景色で静まりかえった室に、無言のまま懸命にひく琴の音、揺らす琴の弦作者情景が目にうかび、すばらしいすきな句と思いいただきました。

坂本　一光　選

《1・31・61・108・128・146・154・177・185・192》

31　一つずつ手離す齢秋の暮
（灘波　瑞枝）

一つずつ歳を重ねながら人は生きてゆく。そういうものだと思っていた。しかしそうではなかった。歳を重ねるということは、一つずつ歳を手離すことでもあるのだ。取り戻すことのできない一年がまた過ぎる。「手離す齢」への愛惜の念が迫る。

畑　正彦　選

《9・31・44・45・116・124・154・155・163・205》

本田　圭子　選

《8・88・90・142・153・154・158・168・190・195》

岡村　君香　選

《24・40・56・73・94・99・116・124・154・157》

116　三月の色鉛筆に恋をする
（陣野千恵子）

三月の柔らかい陽射しと色鉛筆の淡い色合いとのマッチングがとても素敵だと思いました。初恋の淡い恋を想像しほっこりした気持ちになりました。鉛筆を「えんぴつ」と平仮名にすると、更に柔らかさを表現できたのではないかと思いました。

林　香澄　選

《23・37・45・71・79・88・90・91・136・146》

平田千代子　選

《7・31・56・58・88・145・147・158・193・197》

58　晩年に思いめぐらすちゃんちゃんこ
（時松由美子）

この句を読んで、「思い出すのではない、忘れることができないだけだ」と言った谷川俊太郎の詩を思い出した。年をとると幼い頃のことをよく思い出す。田舎ではどこの家も大人数の賑やかだった昭和の時代、子どもの頃祖母や母の手になるちゃんちゃんこを着て遊んだことを覚えている。この句はちゃんちゃんこを見て幼かった頃を思い出したのだろうか。昭和生れは誰にもこういう思い出があると思うのだが。

田中　葉月　選

《4・8・9・70・77・88・119・141・146・163》

赤嶺　信子　選

≪4・16・44・56・82・103・121・128・136・189≫

上田たかし　選

≪18・31・69・74・82・116・130・167・200・210≫

116　三月の色鉛筆に恋をする　（陣野千恵子）

十二色の色鉛筆を前にして、どの色で、どんな景色にしてみようか？　いや、赤は恋の成就か、ピンクは淡い恋のはじまりか、黒は悲恋かなどと、作者の意図に填（はま）りながら想像してゆくと、いろんな夢が膨らむ。坪内捻典氏の、「三月の甘納豆のうふふふふ」もあるが、三月という月の季節感が人間を明るく誘っていく様子を巧みに示唆している。

吉原　恵一　選

≪54・61・67・79・88・89・156・158・192・199≫

東　香代子　選

≪36・58・72・81・88・98・108・142・167・177≫

田原　夏子　選

≪17・31・41・73・124・134・145・163・189・206≫

73　立春や新書の香りゆたかなり　（佐藤　哲夫）

立春は太陽暦の二月四日頃。まだまだ寒い季節。それでも新しい年になって日の光も明るく感じるようになった。読みたくて入手した新書に陽射しが当たると新書からゆたかなれしい香りがしてくるようで希望が湧いてくる。

大川　千明　選

≪4・33・52・69・72・133・145・146・147・157≫

丘　友子　選

≪4・16・24・31・45・73・81・154・163・189≫

81　山茶花を散らし跳びたつ群雀　（大川　千秋）

雀は群れて何をしていたのであろうか。突然の音か気配を察し、一斉に跳びたった。美しく咲いていた山茶花が一瞬にして無残にも蹴散らされてしまった。空に高く舞いあがる飛ぶよりも跳ぶという文字の使用により、スピード感と躍動感を想像させる。

菅　勲　選

≪10・11・19・56・85・103・104・109・116・164≫

164　冬ぬくし長野馬貞の墓掃除　（小川　良子）

長野馬貞は、江戸時代前期の医師俳人で九重町に墓地がありますが、九重町の方がいつもきれいに掃除をしているようで、私も墓参して感心しました。現代の九重の方の心に永々と引き続けられ九重町の文化がかいまみえこの句の冬ぬくしと墓掃除に郷愁を感じました。

鍬田　健二　選

≪2・12・29・76・88・91・127・146・157・158≫

146　月の射る土偶はああと言ひしまま　（福田　英子）

縄文時代に造られた土偶。その謎の形は女性や妊婦を型取ったものと言われているが、実のところはまだ何もわからないそうである。その土偶に月が射し、物を言っている様。ただ、ああと言っているよう。神秘に満ちている。現代人になにかを伝えようとしているのか。全くの謎。だからこそ、自分たちで考えよと言われているかのようだ。そのメッセージを感じとった作者に感心しました。

鎌倉真由美　選

≪12・36・50・59・92・97・113・146・168・184≫

50　草刈り女家風に慣れし腰かげん　（菅　攝子）

鎌も使えなかった新妻が、重ねた年月の中で、今ではビーバーなる草刈機を自在にあやつり草を切っていく。細かった腰も、程よく肉がつき健康な色気をかもし出している。草を刈る姿は姑にてきたか。「腰かげん」気に入りました。

児玉　利子　選

≪10・19・24・36・67・123・125・129・155・161≫

井上　則子　選

≪19・31・44・50・72・123・129・146・155・205≫

白土　正江　選

≪13・85・88・92・113・117・130・145・166・167≫

113　柚子の湯に人棲む胸をはなちけり　（伊藤　利恵）

この句のように風呂に入れば、緊張感がゆるみリラックスする。とくに柚子湯となれば特別である。柑橘のさわやかな香とまったりとした湯が肌をすべすべさせる。日頃から胸の奥にしまっていた人のことが自然と溢れてきて、バス

タブで柚子を相手にニンマリとしている私であると読みました。主人公は男性でも女性でもマイノリティでもＯＫ。自然な気持ちだから……。日本の伝統的な生活習慣のお風呂、柚子湯は素晴らしいです。

田中　充　選

31　一つづつ手離す齢秋の暮

（灘波　瑞枝）

老境に入った心境を詠んだ句であり、下五から一抹の「寂しさ」が伝わる。年齢を重ねれば、誰しも自分の来し方行く末に思いを巡らすようになる。次第に残された時間が少なくなり、過去に経験したことの記憶も薄れてゆく。生きることは、まさに一つずつ齢を手離すことである。

昔、「人生は冥土までの暇つぶし」と言い放った高僧がいた。激動の昭和の時代を生きた者は強い。余生を楽しみ、穏やかな気持ちで「そのとき」を迎えたい。

陣野千恵子　選

《4・8・28・44・57・91・154・163・167・195》

西峯　峰子　選

《4・9・31・35・44・59・125・151・191・192》

足立　町子　選

《16・18・44・77・83・97・106・116・117・167》

117　突然の陽射しにひるむ蕗の薹

（陣野千恵子）

日本に待春の言葉は多いが、蕗の薹は待春にピッタリの季語である。毎日のように庭をうろうろしていた私（町子）は蕗の薹を二つ見つけた。退職を決めたばかりのまだ寒い朝だったので、「蕗の薹二つ見つけて退職す」という句を詠んだ。

蕗の薹の大方の句は、春の使者として正面から詠まれているものだが、この句は、蕗の薹の内面に迫ろうとしている。この柔軟かつ新鮮な発想に共感した。

倉迫　順子　選

《32・59・79・88・99・112・124・146・150・175》

146　月の射る土偶はああと言ひしまま

（福田　英子）

太古から土偶は見て来た。民が土に塗れて働く姿を、戦に巻き込まれ右往左往する姿を、凶作で食べ物に事欠いた日々を。土偶は何も言わずに「ああ」という型の口のまま、民を見守り続けて来た。コロナ禍もしかり。ただ時の流れを静かに見守るだけ。月の光は射るようにその土偶を照らしている。

松廣　李子　選

《11・31・45・72・91・105・135・138・166・195》

幸谷　恵子　選

《7・33・40・44・98・109・119・125・133・139》

98　小春日の窓辺に椅子を二つ置く

（赤嶺　信子）

寒さに向かう生活の中、ひととき迎える暖かい日。今日はお茶でも飲もうと椅子に座る姿が浮かぶ。作者は独り暮らしであろうか。もう一つの椅子は亡き人や訪ねて来る友人のための椅子であろうか。小春日の中で誰かと語り合う。穏やかな暮らしぶりが想像される。何げない生活の一コマに作者の優しい人柄が伝わって来る。

※点盛と選評の作品番号は、編集部で作者順に変換して掲載しました。

事務局便り　「俳句の作り方、味わい方」

当協会の「会員を拡大しよう、協会の影響力を大きくしよう」という方針のもとで新入会員の獲得がコロナ禍の中でも進められ、今や入会二、三年未満の会員が協会全会員の半分を占めるようになりました。

もちろん「新会員イコール俳句初心者」というわけではありませんが、「勉強したい、俳句が上手くなりたい」という会員が増えてきていることは間違いのないところです。

それで協会として「学べる」という観点を考慮した各種イベントを計画すると同時に、会報、句会報でも「学べる」ことを重視した編集に心がけています。

この「句会報」は「第一回雑詠句会」「第二回雑詠句会」「自薦作品」の、年間三回の誌上句会を中心にした内容です。俳句の上達は「まず、ひと様に自分の俳句を見てもらう」ことか

ら始まります。頭の中では、自分が作ったのですから、全部の句に愛着があるし、全部が名句に思えるでしょう。これは新人だけでなくベテランの人も同じです。新人とベテランの違いは、他人の評価を受けて今後にフィードバックしたいと思うかどうかです。投句はもう少し上手くなってからと先送りしていたら、いつまでも発表する機会が巡ってきません。恥ずかしくても、見切り発車でも、まず発表して他人の評価を受けることが大切です。

今号を読んでも分かると思いますが、当協会の「先生クラスの会員の選句」でも、採っている作品はそれぞれに驚くほど違います。現代の俳句は誰にとっても「良い作品」というものはほとんどありません。多様性こそが現代俳句の特徴だと定義する先生もいます。

また、点盛の点数は高い句でも、自分が信頼する先生が選んでいないこともあるでしょう。信頼する先生がどの句を選び、どの句を選ばなかったのか、それはなぜか、と考えるのは有益なことです。

編集部は会員の作品を見るのが仕事です。その立場から言えば、在籍十年以上のベテランの句で、すごく良いところを捉えているのに、最後の表記で台無しになっていると思える作品がたくさんあります。その結果その人たちの作品にはあまり点数が入りません。つまり共感されていません。共感されるかどうかは、内容が良いかどうかではなく、その内容のどこを切り取るか、どう表記するかという、ほんの小さな点に負っていることが多いものです。

自分の悪い癖はなかなか自分では気付きません。指摘されれば一瞬で直りますが、独学で会得するには二十年も三十年もかかるかも知れません。本当にもったいないことです。信頼する先生に師事したり、信頼できる句会に参加することをお勧めするのは、そうした理由からです。

この句会報のような文書では、良い点を褒めることはできても、悪い点を指摘することはなかなか難しいことです。できるだけお互いに成長できる誌面構成を工夫していきたいと思います。アイディアをお持ちの方はぜひ事務局にお知らせください。

作句と同時に大切なのが選句です。良い選句とは「作品の書かれた通りに理解すること。味わうこと」ということに尽きます。これは簡単なようでとても難しいことです。誰しも好きなジャンルがあり、好きなフレーズがありますから、好きな単語やフレーズが出てきたら作品そっちのけで、自分の思いになぞらえて解釈をしがちです。「柿熟れる」と書いてあれば、作品はそんなことを描いていないのに過疎を憂いたり、「派兵」という言葉が出てきただけで反戦平和の句だと勝手に解釈してしまいます。多かれ少なかれ、ほとんどの人がこんな失敗をおかします。俳壇の有名な先生も似たようなものです。これは作品は厳しい批判の目にいつも晒されるので、自然に上達していきますが、選句や選評を批判される機会はほとんどないという理由に拠るものです。

句会報では、そうした選句や選句力を養うことにも留意していきたいと思います。

作品を書かれたとおりに理解する力は「読解力」ですが、それ以前に書かれてある言葉の意味と文法を正しく把握することが大切です。「一般の文法と俳句の文法は違う」と豪語する俳人もいますし、実際に俳句ではそんな側面もありますが、できるだけ一般の文学好きな人が理解しやすい俳句を書きたいものです。俳句界だけでしか通用しない文法は、文学愛好者が俳句愛好者になることを妨げます。

彼女が撃った
彼女を撃った

助詞の一字が違うだけで、俳句の景色は全く違う様相を見せます。俳句に文法は必要ないのではなく、十七音の俳句だからこそ文法が重要になります。「詩」には常識は通じません。「死んだ人と話せるわけないよな」というように、繋がりを常識で判断できません。正しい文法で書くこと、逆に常識で判断せず書かれた文法通りに解釈することが俳句の鉄則です。

最後に第一回雑詠句会の選句で気付いたことをあげます。

百千鳥風青ければ青く鳴く

この句は清浄感のあるすてきな作品ですが、あの有名な高屋窓秋の「ちるさくら海あをければ海へちる」を知っている人は採れなかったの

ではないでしょうか。反対に「知ってはいたが、本歌取の作品として選んだ」という人もあるかも知れません。十七音の俳句の総合的な評価は、極めて難しいということを改めて教えてくれる作品でした。

指切の小指がさわぐ夏祭り

指切りは固い約束。夏祭りを題材に青春の一途さが上手に形象化された好句だと思いました。一方、「指切の小指が疼く夏祭り」とすると、世界は一変します。遠い昔の果たされなかった約束を、いまでも後悔しているという、屈折した作品になります。順風な作品か、屈折した作品かは、作者と読者の好みの問題だと思います。

晩年に思いめぐらすちゃんちゃんこ

この句は、A「ちゃんちゃんこが思った」、B「私がちゃんちゃんこを見て思った」の二つの解釈がありますが、Bの解釈は成り立たないのではないでしょうか。この構文は「晩年に思いめぐらす花子さん」と一緒で、「花子さん」が思いの主体です。「めぐらす」は花子さんにかかる連体形ということになります。この解釈は無理がありません。

私を主語にすれば「晩年に思いめぐらす。ちゃんちゃんこ。」のように一句に句点が二つ入ることになります。つまり「めぐらす」は終止形です。「切れ」というには不自然です。

口語形の「巡らす」は五段活用ですから終止形と連体形が同じです。そこが問題を分かりにくくしているのかも知れません。ただBの解釈は古い句会では驚くほど頻発します。有名作家の名句と呼ばれている作品にもあります。認めても良いのですが、少なくともこれから俳句を覚える人は、日本語として不自然な書き方は避けることが大切だと思います。

作者が、ちゃんちゃんこに自分の思いを対象化して、Aのつもりで作ったなら、何ら問題のない良い句です。もしBのように書きたいのなら「晩年にめぐらす思いちゃんちゃんこ」のように語順を工夫すれば、自然な「切れ」ができて、立派にBの作品になります。

令和三年　第２回雑詠句会　選句用作品集

第2回雑詠句会には73名２１９句が集まりました。投句数が多くなって選句が大変という新会員の訴えをよく聞きます。それで今回は何回かに分けて選句ができるように、30句ずつ余白を空けることにしました。時間を空けて選句をする場合、意識的に同じコンディションに持っていくことが大切です。

1 リモートの母の微笑枇杷熟るる
2 車椅子大きく揺れて枯野かな
3 したたかに生きて人生ねじり花
4 リモートにて励む学生今宵の春
5 冥界へ迷い込む道夕桜
6 薫風の溢れていても過疎のまま
7 蛇苺確かこのあたり道だった
8 蛍追う母の気配の漂うて
9 稚児の手に支えられたる敬老日
10 髪洗うふしくれの手にブラシもつ
11 母の日のバラ地に下ろす明日は晴れ
12 梟や山頭火かなし版画展
13 研する野辺の送りか時鳥
14 桃熟れて命の水の美しさ
15 竹林に木洩れ日をどる立夏かな
16 フリージャの似合う家です空家です
17 天の下かずらの花や良寛忌
18 風鈴やワクチン済みし安堵して
19 それぞれに令和生れのつばめの子
20 紫陽花や句作の色の日日をゆく
21 混沌とコロナが地球をもてあそぶ
22 夏芝居はねてコロナの役者衆
23 生け贄に効なし齢鎮花祭
24 たてがみを立夏に向けていななけり
25 夏帽子深めにかぶる影法師
26 過疎の村温かく塗る色鉛筆
27 夏至が来て「夏の夜の夢」生き返る
28 子を亡くせし母にもがせる初トマト
29 麦秋をごくんごくんとコンバイン
30 「焼き場の少年」今だ不明の長崎忌
31 夏の樹の中出棺のクラクション
32 卵黄の朧を破る箸の先
33 足先を遠ざける音春の雨
34 太陽とトマトが急かすからサラダ
35 カンバスに椿を咲かせステイホーム
36 山鳴れば母のひしめく梅筵

自薦作品募集

※自薦作品を募集します。一人四句で協会未発表のものをご応募ください。
※この自薦作品四句と、年二回の雑詠句会（各三句）の一人計十句が特別選者による年間一句賞の対象になります。
※締切は十月四日（月）消印有効。
※締切までの期間が短いのでご注意ください。
※第二回雑詠句会の選句締切と一緒ですので同封のファックス用紙をご使用ください。
※郵送やメールなど、用紙形式にはこだわりません。便利な方法で返信してください。
※送り先は事務局まで。
※年間一句賞は次回総会で表彰するとともに会報一二四号で紹介します。

51 「とうちゃんな」「そうじゃ」病室の薄暑
52 風鈴に風のつぶやき奥座敷
53 流木の馬にも翼夏来たる
54 残る鴨ため息ばかりついており
55 絵手紙のアマビエおどけ梅雨に入る
56 七夕や夫の遺せしオーディオ機
57 コロナ禍や直葬増える初蛍
58 復興の叶わぬ渇き遠霞
59 新涼の歩幅小さき姉の後
60 夏至の日と知りつつ書架の子規兜太
61 八月忌ペットボトルの固い蓋
62 里帰り今年もツバメ巣に帰る
63 短夜の夢の続きについて行く
64 日曜は目覚ましのよう草刈機
65 夜の廊下旅する母よ半夏生草
66 街がみなピサの斜塔となる西日
67 白無垢や沼地の海芋雨似合う
68 ロボットへの愛武者人形は虫干しに
69 ニュートンの林檎を食った影法師
70 あじさいの霧の深さや朝を読む
71 砂糖よりも甘い声して蛍狩
72 菜の花の香りの中で握り飯
73 一坪の痩せ農園に蟻騒ぐ
74 ワクチンの接種日決まり梅雨に入る
75 しばらくは木を貸切に囀れり
76 今日を生き明日ありやなし種をまく
77 夏浅し厨の明り元気なり
78 体操の美しき肩夏来る
79 控え目な風とより添う花菖蒲
80 姑として梅漬け終える家の味
81 ぬくもりの篭もる野良着や夜濯す
82 人の世もぴりりと辛き唐辛子
83 梅酒注ぎこっそり聞くや明日の道
84 ヨタヘロ期それでも背筋シャンと春
85 版画見る托鉢句境夏の雲
86 万緑を引張ってゆく野良着かな
87 あやとりの少女の指の虹の橋
88 キャンバスに瑠璃こぼれだす星月夜
89 日が暮れてまだくちびるに雛のうた
90 桜吹雪笑顔難かし車椅子
91 紫陽花やのど飴一つ朝の庭
92 空っぽのポストの中の五月闇
93 冷凍といえども峡の初鰹
94 夏来る母の季節よアッパッパ
95 サングラスの降りて戦後のデモクラシー
96 一頭と数え螢を落としけり
97 更衣余生は軽くなるばかり
98 老鶯の声のみ木立かけ巡る
99 廃校のどの窓からも散る桜
100 浮世絵のタオルを連れて花菖蒲
101 若葉騒さみしき丈の死後の杖
102 危険防止のフェンスを登る葛の蔓
103 八月の己の影を確かめる
104 丸顔の少女が計る大あじさい
105 夏草や母は働くために生き
106 春霖や空の香りを包みたる
107 玉葱の芯に自爆の兆しあり
108 葱坊主マイナンバーカード下げている
109 大根炊き産土の鳥来て祝う
110 ほんのりとほおを染めたる春の酒
111 うつし世の愚かさ吸ふや濃紫陽花
50 若き日の埋まらぬピース花水木
49 蕗の筋取りつつ母の歳を追う
48 もう風を操っている夏つばめ
47 梅雨晴間ベランダ飾る布団干し
46 万緑へ上がる遮断機村を編む
45 麦の青風の形に見えにけり
44 朧夜やどこに行ったか反戦歌
43 すれ違ふ和傘の女よ濃紫陽花
42 千切られて土に並びし夏の花
41 「とうきび」の旗めく阿蘇路へ遠まわり
40 父の日や宅配便に夫の顔
39 饒舌のあとの沈黙ビール注ぐ
38 棚田にも優しき風が波打ちて
37

111 立夏へと伸びる白球ストライク！
112 薫風や飯田高原すがすがし
113 山眠る行くあてのない回数券
114 夏花の追肥を少し自分にも
115 盛り場の盛り塩舐める夜の蛇
116 惜しみなく奪う木立の毛虫達
117 夏帽子お陽さま詰めて帰りけり
118 ホトトギスまた失言を繰り返す
119 シャワー浴びる診察前の一仕事
120 寝ころべばそこがふるさとねじり花

121 野茨の棘の数だけ恋の傷
122 七月の湖面に父の糸垂らす
123 雨垂れの間等しく梅雨入かな
124 駄菓子屋の奥に住みつく風車
125 虹が出たやっぱり虹は美しい
126 炎天の街を首なき影がゆく
127 若葉風掬って帽子目深にす
128 梅実り親しき人の逝くを知る
129 願掛けの明けてビールの泡苦し
130 青鷺来る三十四人の学級
131 行く春や個個に名をもつ死者生者
132 原爆忌戦死者の墓尖がり出す
133 風の道覚えているのかブッポウソウ
134 半夏生妻の無口なのも困る
135 番犬がホタルの光り夢を見る
136 ヘルパーにキッチン譲る通し鴨
137 湯上がりのグッと一杯夏の月
138 花アカシア帰らざる日の旅鞄
139 氏神に誓えば百舌の高鳴けり
140 キラキラと木洩れ日落とす新樹陰

141 胡瓜に手差し伸べてゐる少年A
142 夏草の秘密基地への逃避行
143 田を植えて鶯渓の初仕事
144 青柿はゆっくり太る落ちぬため
145 あの頃にタイムスリップして梅酒
146 目薬を見つめる右目星涼し
147 一口の新茶の味の深さかな
148 湯煙に春一行の来ていたる
149 おもしろきこともなき世も花は咲く
150 一人占め思いがままに森林浴

151 再会の今宵ビールの泡ゆたか
152 久女史の聞きし声かもほととぎす
153 田植機もぽつんと一台峡の村
154 炎天や根性論を懐かしむ
155 寒紅を一筋ひいて顔を上ぐ
156 渋滞の排気ガスにも秋の色
157 齢なんてただの数字と敬老日
158 青田波ワクチン帰りのバス奔る
159 夕星のひそとこぼるる植田かな
160 堅物も笑いはじけて夏来たる
161 天領の水匂う里五月かな
162 武具飾る部屋に令和の風を入れ
163 夏の鶯少し気を抜き楽に聴き
164 雲の峰響く高原TAO太鼓
165 ゆれ止まぬ日本列島青葉騒
166 入学の孫との写真これに決め
167 ジーパンの膝の穴より葱坊主
168 あの夏を壕に飛びこむ四歳児
169 蜉蝣に星に命のありにけり
170 合い席の間に春の黙を置く

171 蚊遣り火のかおり鼻先むせぶ夜
172 被爆樹に遺る哀しみ蝉しぐれ
173 足裏に心が見えて梅雨晴間
174 花は葉に子は親を捨て骨になり
175 茅風破れかぶれの販促旗
176 親兄弟亡きが孤高の兜虫
177 菜の花や陰膳に置く玉子焼
178 夕虹の橋の袂を父母の影
179 満開の花に見とれし四十路坂
180 胡瓜もみして見る辛い妻の愚痴

181 田の神のほほえみ返し稲に花
182 天皇の天地にこぼる新樹光
183 仏だんに新茶の香り匂う朝
184 片耳で蚊を追っている眠りばな
185 夏の友母と一緒に品づくり
186 「月と屋根」遠き昭和の木版画
187 初夏の旧き迷路や城下町
188 ひまはりはおひさまのちちもらふとふ
189 陶枕が哀しい恋を取り結ぶ
190 一条の灯り代田に映り込む
191 言い訳を引っ張っている雲の峰
192 冷水を腹に染み込む午後休み
193 蛍よりマスクが目立つ蛍狩り
194 玉葱の憂いにチーズ絡ませる
195 大の字に身体反らせて夏に入る
196 網戸して吾子の寝息の揃ひけり
197 青葉風すらすらと出るほめ言葉
198 風鈴をもらって困る冷暖房
199 蜘蛛の糸そっとほどいて母と会う
200 上二段活用で鳴く行々子

210209208207206205204203202201

茗荷食べ頼まれしこと思ひ出す
朝顔の脇目もふらず蔓空へ
短夜の子を看取る母の面窶れ
地虫出て先ず身の錆を落としおり
ははの年越えて母の意くめる夏
白鷺や寂しからずや田に独り
エロスにて始まる古事記桃啜る
墓まいり石の風化が汗流れ
鬱の日をそっと寄りそうアマリリス
父の名や「平和の礎」夏の空

219218217216215214213212211

アイリスや別れを刻む花時計
思い出が少し芽を出す早苗月
新涼やパン焼く朝は胸弾む
ダンサーの胸鋭角に飛ぶ梅雨の蝶
青芒父載せてゆく霊柩車
落ちた梅朝の色彩はにかんで
手をはなし歩きたる子の青田風
おじさんがくるくる回す日傘かな
明け易し嬰児（やや）にまだ無き土踏まず

２１９句から１０句の選句をお願いします

◇締切は１０月４日（月）消印有効です

選句とは全ての作品（今回は二百十九句）の中からあなたが良句と認める所定の数（今回は十句）を選ぶことです。その際大切なことは、あなたが良句だと思ったその思いが、本当にその作品に表現されているかどうか厳しくチェックすることです。単にあなたが好きな単語やフレーズが書いてあるという理由だけで選んではいませんか。それでは作品でなく、作品の一部分だけで良否を決めていることになります。

そんな選び方をしていたら、あなた自身だけでなく、その句の作者のためにもなりません。

作品と同様に、選句も生まれつき上手い人はいません。それを勉強するための協会です。正しい選は協会のレベルを向上させます。

投句の有無にかかわらず、できるだけ多くの会員が参加してくださるよう、お願いします。また選評も短くてかまいませんから、できるだけ書いてください。書くことで思いが整理できて、俳句の理解がより深くなります。

当協会が特に選句・選評を重視するのは、大分県現代俳句協会賞や年間一句賞など、本協会の選者を養成したいからです。選者はどこか特別なところから、自動的に訪れるわけではありません。現在の新会員が、やがて協会の指導部になる日はきっと来ます。いま協会は著しい人材不足の中にあります。会員が実力をつけることが当協会が繁栄を続ける唯一の保障です。

投句・選句・選評用紙はコンビニからお送りください。全国どこのコンビニでも五十円で送れます。慣れていない方はコンビニ店員におたずねください。

自宅にファックスがある方は、もちろん自宅からでも良いのですが、ファックス機のメンテナンスを充分に行ってください。毎回白紙や、途中で文字が切れたもの、文字がかすれたり潰れたりしているものがあり、判読できないことがあります。自信のない場合はコンビニをお使いください。

郵送や、メールなど、正しく読めさえすれば形式にはこだわりませんので、どうかよろしくお願いします。

大分県現代俳句協会
OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION
会長　有村王志
《事務局》
〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436
足立　攝方
TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481
URL:http://www.gendaihaiku.net
E-Mail: info@gendaihaiku.net